

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531222

研究課題名(和文) 中堅期教師の国語科実践的知識の研究

研究課題名(英文) A case study on mid-career teachers' practical knowledge in the Japanese language

研究代表者

松崎 正治 (MATSUZAKI, MASAHARU)

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：20219421

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：初任期の教師が、同僚メンターとしてのベテラン教師に学びながら実践的知識を成長させ、中堅期の教師になっていく過程を観察データやインタビューによって記述し、分析した。その事例研究の結果、実践的知識を成長させる契機として、四点を明らかにした。

また、初任期教師を中堅期教師に育てていくメンターとしての教師自身が、養成時代から入職後の約十年間で、どのように中堅期教師として自らを成長させていったのかを事例研究した。その結果、実践的知識の成長の契機として、五点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：By describing the interview and observation data to the process of growing a practical knowledge while learning to veteran teachers as mentors colleagues, becoming a mid-career teacher, teacher of first term of office, was analyzed. Results of the case study, as an opportunity to grow the practical knowledge, I revealed the four points.

It was also a case study in about ten years of hiring after the training period, how teachers themselves as mentors to foster in the first term teacher, whether went grown themselves as mid-career teacher. As a result, as an opportunity of growth of practical knowledge, I revealed the five points.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：実践的知識 教師教育 中堅期 メンター 暗黙知 学校文化 同僚性

1. 研究開始当初の背景

(1) 技術的熟達者から反省的实践家モデルへ

従来の教師教育研究においては、カリキュラムを使用する側としての教師を念頭に、教育実践は授業の科学的原理や技術の合理的適用であり、教師を技術的熟達者へと育てることを想定してきた。すなわち、教科書と標準的な年間指導計画をもとに、授業の法則性に即していかにうまく教えるのかということに年々熟達していく直線的成長モデルとして、教師の力量形成は考えられてきたのである。そこでの教師は、公的な枠組みでのカリキュラムに即した《教材の伝達 知識の記憶 評価》というサイクルの授業を行うものとされてきた。これは、教える側にとっての制度的な構想として、カリキュラムをとらえる見方に立っている。

それに対して、カリキュラムを教師と子どもとの創造的な活動とともに生成発展するものであり、学習者の学びの履歴であることから、教師をカリキュラム創造のデザイナーとして考える教師モデルの考え方も登場してきた。このモデルは、学ぶ側にとっての意味を表現するものとしてカリキュラムをとらえる見方に立っている。教師は、変化する実践状況の中で、直面する状況に応じて行為しながら、次の行為への思考や判断を行っている。そういう「行為の中の省察」(reflection in action)を行い、実践的認識を深めていく教師をショーン(2001)は、反省的实践家(reflective practitioner)と呼んだ。反省的实践家は、直線的に成長するのではなく、教師としてのライフコースで大小の成功や失敗を重ねつつ、いわば、らせん的に力量を形成していく。これからの教師は、反省的实践家としてカリキュラムをデザインし実践する力量が求められよう。

これまでの反省的实践家としての教師教育研究は、佐藤・岩川・秋田(1990)のように、反省的实践家の実践的思考様式の特徴(即興的な思考や文脈的な思考など)を明らかにする研究が出发点であった。さらに、藤澤(2004)のように、面接調査などから、生徒制御技術(褒め方叱り方のコツなど)や生徒行動理解(人間関係など)など、授業づくりの一般的な観点から反省的实践家の学習指導の力量形成を明らかにしようとする研究が続いた。

(2) 中堅期・国語科の実践的知識

そもそも反省的实践家としての教師は授業の中で「行為の中の省察」を行い、実践的認識を深めているのであった。そうであるなら、授業の経験そのものを詳細に分析し、そこで用いられる実践的知識を明らかにしていかないと、反省的实践家としての教師の力量形成過程は見えてこない。

教師の実践的知識の研究は、英米圏の授業

研究や教師教育研究において、カーター(Carter1990)のレビューに見られるように、現在有力な研究動向となっている。また、日本においても、教師の実践的知識に関する理論的考察(佐藤 1997)や、その実証的探究の試み(秋田 1998)があらわれている。

ただし、現状では、具体的な授業にかかわる実践的知識の探究は、これからの研究課題である。

また、教師のライフサイクルにおける中堅期は、山崎(2002)によれば、入職後およそ十年間経過して、年齢的には30歳代から40歳代中頃までとされる。校務分掌の重要なポストを占めて、学校運営の中心となってくる。仕事の責任が重くなる時期である。初任期を経て、教師としてのアイデンティティが一応確立されていたのが、様々な転機を迎えて、教師アイデンティティが揺さぶられる時期でもある。これは危機ではあるが、同時に教師として大きく成長する契機でもある。

また、中堅期は、初任期の教師を始め、職場の同僚を支えて彼らの成長を図る指導的な仕事をすることが多くなる。現在、20代の初任期の教師が大量採用され、彼らを職場で育てていくことがきわめて重要であるが、そのための知見が解明されているとは言い難い。

そこで、本研究では、教師の中堅期における国語科授業に的を絞って、教師生活の転機における実践的知識の成長を分析し、また同僚性を発揮して成長を図る様相を分析して、中堅期の教師が反省的实践家として国語科における実践的知識を形成していく具体相を明らかにしていく。

《文献》

秋田喜代美(1998)「授業をイメージする」浅田匡他編『成長する教師 教師学への誘い』金子書房

Carter, K.(1990) Teachers' knowledge and learning to teach. In W.R.Houston (ed.), Handbook of research on teacher education. Macmillan.

藤澤伸介(2004)『「反省的实践家」としての教師の学習指導力の形成過程』風間書房

佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美(1990)「教師の実践的思考様式に関する研究(1) 熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に」・『東京大学教育学部紀要』第30号
佐藤学(1996)『カリキュラムの批評 公共性の再構築へ』世織書房

佐藤学(1997)『教師というアポリア 反省的实践へ』世織書房

ショーン, D. 佐藤学ほか訳(2001)『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』ゆみる出版

山崎準二(2002)『教師のライフコース研究』創風社

2. 研究の目的

初任期教師が、メンターとの関わりの中で、授業における国語科実践的知識をどのように深めて中堅期教師となっていくのか。また、メンターとしての中堅期教師は、いかにしてメンターになっていったのか。成長の様相を分析して、反省的实践家として実践的知識を形成していく具体相を明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1) 中堅期の学校教師が反省的实践家として、力量形成していく過程を国語科の授業分析を通して事例的に研究していく。その際、教師の転機と同僚性に着目して、次の二つの視点から捉える試みをする。

第一は、インタビューや実践記録などをもとにして、教師の《ライフヒストリー》から、巨視的に捉える視点である。

第二は、教師の《カリキュラム経験》から、微視的に捉える視点である。

(2) これらの研究は、次の3つの段階を踏んで行われた。

文献研究による先行研究と分析枠組みの確認、

授業実践のデータ収集とインタビュー、データとインタビュー資料の分析

4. 研究成果

(1) 初任期の教師が、同僚メンターとしてのベテラン教師に学びながら実践的知識を成長させ、中堅期の教師になっていく過程を観察データやインタビューによって記述し、分析した。その事例研究の結果、実践的知識を成長させる契機として、次の四つが重要であることを明らかにした。

なってみることで暗黙知を理解する

ベテラン教師が、児童の内面を豊かに想像しながら、授業の次の進行を考えていくというような授業における即興的思考は、暗黙知であるだけに言葉で説明しがたいところがあるし、他者からも見えにくい。したがって、初任期教師が模倣しようにも難しい。そこで、初任期教師がベテラン教師の授業に児童役として参加してみて、児童の側からの見えを体感するという方法を使うことで、外から見えない暗黙知を理解する道を見いだした。

なじませていき「はまりどころを見つける」

初任期教師が で理解した実践的知識は、ベテラン教師の授業の文脈からいったん外して、「脱文脈化」される必要がある。そして、初任期教師が自分の授業の文脈に合わせて「再文脈化」しないと行けない。これを自分の実践として「はまりどころを見つける」と呼ぼう。学んだことを自分の授業スタイル

にしっくりとなじませていく過程である。その時、指標となる特定の子どもたち（特に普段から学習上の配慮が必要な児童）の理解度に注目することで、ベテランから学んだ実践的知識が、自分の授業スタイルとしてなじんでいるかが分かる。

たとえて広げる

初任期教師は、一つの教科学習で学んだ実践的知識を類推的思考によって、他教科・他学年にも広げていくことができる。たとえて広げるといふ方法である。その思考を促進するものは、授業や学習者をこのようにしていきたいというビジョンと強い思いである。

学校文化の中で省察する

実践的知識が、ベテラン教師から初任期教師に伝承されるとき、断片的な知識が習得され応用されるわけではない。ベテラン教師のメンターが持つ価値観が埋め込まれた学校文化に若手の教師が参加して、共にその学校文化を創り上げ拡張するその過程で、省察を繰り返して学んでいくのである。

(2) いっぽう、初任期教師を中堅期教師に育てていくメンターとしての教師自身が、養成時代から入職後の約十年間で、どのように中堅期教師として自らを成長させていったのかを事例研究した。その結果、実践的知識の成長の契機として次の五点の重要性を明らかにした。

基底となる本質的な知識の重要性

養成段階では、片々の教育技術よりも、文学論・哲学・言語学などの原理論の学びが推奨された。それが実践の思想的基盤となって、後に柔軟に実践的知識を取捨選択したり、作り変えて我が物とすることが可能になった。教育技術の基盤や枠組みとなる理論や思想をまず身につけることが重要である。それは、教育実践家に学ぶときも同様である。

充実したメンタリング体験

後にメンターとなる教師の初任者研修時代の指導教員が、メンターとしてきわめてすぐれた人であることが多い。目の前で示範して、それを押しつけるのではなく初任期教師流に変形するにはどうしたらよいかまでを支援している。そして初任期教師のよいところを伸ばし、新しい領域にも挑戦させた。さらには外部から寄せられる苦情などを自分のところで押しとどめ、フォローしていた。こうして、初任期教師自身に、メンターの重要性が刻印されたのである。

乗り越え経験

教師が成長するには、壁が必要である。例えば、自分の教育実践を理解してくれない周囲の教師である。そういう壁にぶつかって乗り越えることで、自分の実践をより確かで豊かなものにすることができる。

子どもから教えられる

子どもたちの実態に教えられながら、自分の実践を反省的に振り返ることの重要性を学んだ。

同僚性とその継承

相互に支え合い助け合う同僚性は、教師の成長を支える。さらにこの同僚性のあり方は継承していくべきものである。与えられる側から与える側へ。そしてその継承。このサイクルの重要性に気づいたのである。

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

松崎正治、メンターとしての教師はいかに育ったか 女性教師の事例研究から、月刊国語教育研究、日本国語教育学会、査読無、第 506 号、2014、50-57、

松崎正治、協働性・共同性・同僚性と教師の成長、国語科教育、全国大学国語教育学会、査読有、第 71 集、2012、112-114、

http://ci.nii.ac.jp/els/110009437011.pdf?id=ART0009913956&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1399425625&cp=

〔学会発表〕(計 2件)

松崎正治、同僚に学びながら教師になっていく 初任期から中堅期への成長、第 22 回日本教師教育学会、2012 年 9 月 9 日、東洋大学

松崎正治、初任期から中堅期へ移行する時期の教師の力量形成の研究、第 121 回全国大学国語教育学会、2011 年 10 月 30 日、高知大学

〔図書〕(計 2件)

全国大学国語教育学会編、学芸図書、国語科教育学研究の成果と展望、2013、全 574 ページ(共著・447~454 執筆)

グループ・ディダクティカ編、勁草書房、教師になること・教師であり続けること 困難の中の希望、2012、全 262 ページ(共著・115-136 執筆)

〔その他〕

ホームページ

http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/2578/2578_researcher.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

松崎 正治 (MATSUZAKI MASAHARU)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：20219421